

川田泰代と中国

楊 国光（元中国新聞社東京支局長）

訳・柴田 巖（千葉工業大学専任講師）

一九八〇、九〇年代、記者として東京に常駐していた頃、私は大勢の日本の友と付き合ったが、なかでも忘れ難いのは、高名なベテラン記者で社会運動家でもある川田泰代女史、その人である。川田女史は日中友好人士として、日本に駐在する中国人ジャーナリストのために、常に取材の橋渡しをして下さった。私たちが日本社会の各層と深く接触することができたのは、そのおかげである。特筆すべきは、彼女の剛毅で正直な人となり、中国の同業者の尊敬の的だったことであろう。

★川田と緑川英子

川田泰代は1916年、インテリの家庭に生まれた。彼女が物心がついたとき、父川田友之は東京で大観社書店を営み、英語版の『世界年鑑』を出版していた。川田女史の記憶によれば、父親は若くして家族とともに台湾へ渡って、進歩的思想に染まり、孫文先生とその革命に傾倒、他に先駆けて『三民主義』を翻訳・出版したという。聡明な川田泰代が幼い頃から孫文が中国の傑物であることを知り、敬慕するようになったのも自然の成り行きであった。



1960年10月1日、天安門前。ジャーナリスト代表団として中国を訪問。左から3人目が川田泰代さん

1937年、東京女子大学を卒業した川田泰代は婦人画報社に入社、記者人生の第一歩を踏み出す。この年は、満19歳になったばかりの彼女にとって波乱の一年であった。ときは「蘆溝橋事件」前夜、日本上空にはどす黒い戦雲が立ちこめていた。折も折、うら若き川田泰代の身边で、その後の彼女の生き方に影響を与えた、いわゆる「叛逆事件」が発生する。遠縁の親戚に当たる長谷川テル（1912－1947）が日本を飛び出し、抗日戦争の隊列に一身を投じたことがそれである。

長谷川テルは、中国で「緑川英子」と名乗った日本人エスペランチストであり、国際主義戦士であった。1937年春、渡華し抗日戦争（日中戦争の中国側呼称－訳者）に参加、郭沫若率いる政治部第三庁において日本軍兵士向けの反戦放送を担当した。日本降伏後は、夫劉仁と東北部へ行き、解放戦争に参加した。1947年、不幸にも手術中の感染症がもとで死亡、享年35歳。遺体は黒龍江省の佳木斯（チャムス）烈士陵园に葬られた。

親族関係から言えば、長谷川テルは川田の父親の従姉妹に当たるものの、年齢的には5年上に過ぎなかった。テルは足繁く彼女の家を訪れたし、二人は大の仲良しであった。しかしテルは中

■中国との絆

国行きの計画について川田に漏らしたことはなかった。おそらく川田のことを、学校を出た後の政治に疎い文学少女と見、口に出かかった話をぐっと飲み込んだのであろう（『現代日本婦女列伝』）。

川田泰代が『都新聞』紙上で、写真入りの衝撃的なニュースを目にしたのは、それから一年後であった。緑川英子という「嬌声売国奴」「赤くずれ」とは、長谷川テル本人にほかならなかった。

〔訳者注〕いわゆる「武漢三鎮」（武昌・漢口・漢陽）陥落後の1938年11月1日、『都新聞』（現『東京新聞』）は『嬌声売国奴』の正体はこれ 流暢・日本語を操り怪放送祖国へ毒づく 『赤』くずれ長谷川照子」との大見出しを掲げ、同地での執拗なる反戦放送に従事していた日本人女性の正体が長谷川テルであることを暴露した。以下は同記事の一節であるが、日本軍がいかに彼女の反戦放送に頭を痛めていたかがよく分かる。テルの反戦活動の一端については、拙稿「長谷川テル研究―日中戦争期・中国における反戦活動の軌跡―」（『千葉工業大学研究報告人文編』第三五号、1998年）を参照されたい。

「漢口陥落直前まで漢口放送局のマイクから流暢な日本語で激越な反日デマ放送をしていた日本女性の声が連日聞こえてきたことは既報したが、この祖国日本に弓を引く覆面の売国奴女性の正体が武漢陥落と共に判明、……奈良女高師中退の長谷川照子（27）で、かつて“赤”の“女闘士”として暗躍中に中国留学生と“赤い恋”に結ばれて渡支したものである。本年2月上旬突然香港放送局から女の戸で反戦演説が行われた。然もそれが歯切れのいい流暢な日本語である。この放送を耳にした誰もがマイクの前に起つ覆面の日本女性は何者だろうと深い疑問を抱き当局でもその正体を突きとめるため、躍起となったが皆目判らなかった。次いで広東に現れて何回となく放送は繰り返されたのだ。今夏、わが無敵皇軍が漢口攻略の火蓋を一斉に切るや今度はこの怪放送が漢口を舞台として毎夕行われ、日本軍部の誹謗、日本経済に関するデマが紅い唇に載せて毒づき始めた。……」

川田泰代は頓悟した。テルはもともと反戦主義者であり、戦争に反対するために日本を脱出したのだ、と。川田の心は激しく揺さぶられた。天地は軍国主義の宣伝で覆われていたが、彼女は時世に迎合することはなかった。このときの彼女はすでに自らの頭で考え、しっかりと自分の考えを持った女性に成長していたのである。

1945年8月15日、日本が降服、翌年、極東国際軍事法廷が開廷し、東条英機、土肥原賢二ら主要戦犯が裁かれ、南京大虐殺などの真相も続々と白日のもとにさらされた。川田泰代もファシズムの残虐な本質とそれがアジア、とりわけ中国にもたらした悲惨を明確に認識するに至る。

川田がテルを語る時、そこにはいつも深甚なる敬意が込められている。彼女はテルの脱出について、「彼女は大きな歴史の流れを、正しく方向づけて生き、たたかい。そして若くして命を中国東北地区で失った」と述べ、テルと我が身を引き比べて「自分の無知が恥かしい」（『長谷川テルの足跡をたどる』）と言っているが、若き日、父親の薫陶を受けた川田女史が中国へ視線を向け、その革命の動向に注目するようになったのは、これを機としている。

川田泰代は真理を追求する女性である。朝鮮戦争が勃発した1950年、三児の母親だった彼女は夫と離婚する。以前、「このことで、まる10年苦しんだわ。問題に対する見方、考え方がまるっきり違ったので、意見の衝突が増え、溝が深まったの。例えば朝鮮戦争のときだって、夫は

■中国との絆

戦争で一儲けしようとし、私は反対の態度を採ったの。こうして私たちは別々の道を歩くことになったというわけよ」と、悲しそうに打ち明けてくれた。離婚後、川田女史は薄給で、苦勞しながら子供を育て上げた。

貧者と弱者を憐れみ、虐げられるか弱き者のために一肌脱ぐ、これが川田泰代の性分である。長女は父親側に引き取られていたが、大学に合格しても、前夫とその両親は入学を許さず、「女兒に学問は不要」と言うばかりであった。その娘のために保証人となり大学へ進学させたのは、親権を有さぬ川田の方であった。かつて彼女が意味深長に「古い観念を打ち破るのは至難の技なのよ」と語るのを、私は聞いたことがある。

1960年、川田泰代は小林雄一氏を長とする日本ジャーナリスト会議代表団の一員としてオーストリアで開かれた第二回世界ジャーナリスト集会に出席、代表団は続けてソ連と東欧各国も歴訪した。

その後、代表団は招かれて訪華し、国慶節などのイベントに参加した。中国人民が建国からわずか10年余りでなし遂げた成果は、彼女に深刻な印象を与え、中国に対して好感を抱かせた。

冷戦はピークに達していた。日中間の国交はいまだ正常化していなかった。「赤」のレッテルを貼られ、罵声のなかを社会主義国家を訪問することは、当時としては大変な勇気を必要としたし、一定の犠牲すら払わねばならなかった。果たして川田泰代は帰国すると、長年勤務した婦人画報社を解雇された。しかし彼女は驚ろかなかった。こうなることは予期していたからである。彼女は上司に向かって「私はただの代表団の一員です。何をそんなに慌てふためいているのです！」と言うや、憤然として会社を後にした。

★台湾進歩青年を救出

1968年2月のある日、東京の法政大学博士課程へ入学準備中の台湾人アメリカ留学生陳玉璽（29歳）が法務省出入国管理局において逮捕され、台湾へ強制送還された。台北警備総司令部の獄舎につながれた彼は軍法處の審判を待つ身であったが、その結末が極刑であることは誰の目にも明らかであった。この逮捕劇が露頭すると、政治事件として世間を一時騒然とさせた。

事情はこうである。半年前、当時（ハワイ大学にいた陳玉璽がベトナム反戦デモに参加した廉で台湾当局から帰国を命ぜられた。彼は帰国の途上、東京に立ち寄ったが、華僑の友人の紹介で居候したのが、ほかならぬ川田泰代宅であった。

川田はこの青年と一面識もなかったが、彼の置かれた境遇を知ると、日本によるべなく、また日本語も解さず、幸不幸の定まらぬこの台湾青年に、毅然として救援の手を差し伸べた。日本の諺「窮鳥懐に入れば獵師も殺さず」、彼女は自分の好きなこの諺に従ったわけである。

1966年、孫文先生生誕百周年に際して、川田泰代は日本の孫文先生生誕百周年記念事業委員会事務局長を務めた。彼女の仕事ぶりは情熱に溢れ、いい加減なところは少しもなく、全員から絶賛された。彼女は頼りになる、知られた対華友好人士であった。彼女は陳玉璽が台湾当局の「ブラック・リスト」に載っている事実をつかんだ。とすれば、日本社会でも問題になりかねない。とはいえ、川田の名は対華友好人士として知られており、自らが保証人として表に出るわけにはいかなかった。そこで、高名な弁護士である宮崎竜介氏に、彼の滞日中の身元保証人になってくれるように頼んだのであった。付言すれば、宮崎竜介氏は宮崎滔天の長男である。宮崎滔天（1871－1922）は日本の浪人で、若き日、自由民権思想の影響を受け、侠客の風格があ

■中国との絆

った。彼が日本で孫文の知遇を得たのは一八九七年のことである。20世紀初頭、惠州起義（台湾総督児玉源太郎および民政長官後藤新平から支援の約を得た孫文は1900年、広東省惠州における清朝打倒の挙兵を画するも、あてにしていた日本からの武器弾薬が届かず蜂起に失敗。この際、宮崎滔天は孫文に懇願され、武器仲介の役を担っていた——訳者）の企てに参画し、孫文の革命活動と同盟会の革命主張を日本に紹介、革命党の黄興、宋教仁、章太炎らとも親交を結んだ。1921年、辛亥革命後に孫文に随って南京へ行き、臨時政府成立式典に列席、主要著作に『二十三年之夢』などがある。それゆえ宮崎竜介氏も台湾国民党の最上層部と関係深く、過去、台湾側から「国賓」として何度となく訪台の招待を受けだが、「健康上の理由」で果たせずにいた。

陳玉璽の逮捕・失跡は川田泰代を驚愕させた。彼女は自身の長年の経験から、戒厳令下の台湾に民主、人権がないことを察知していた。陳玉璽の将来は絶望的であった。唯一、効果が期待できるのは、国際社会の世論と関心を喚起することである。とはいえ、当時、中国は「文化大革命」の渦中にあり、それは川田にとって、決してたやすいことではなかった。「どうせ彼は台湾人なんだから……」「スパイかも知れないし」などと、この件に関与しないよう忠告してくれる親切な友人もいた。

しかしながら、川田泰代はそれに耳を貸さず、「台湾人だって中国人じゃないの」と公言して憚らなかった。人々が最終的に自分を理解してくれるものと固く信じていた彼女は勇を奮って一人、こちらからあちらへ、またあちらからこちらへと訴えに駆けずり回り、ついに事件発生から四ヵ月後、「陳玉璽君を守る会」の結成を見たのであった。彼女は社会的名士に「守る会」の世話人を依頼し、宮崎竜介、法政大掌総長中村哲、評論家高木健夫、東京大学教授石田雄。人気映画俳優中村敦夫氏ほか、諸氏が名を連ねた。

これより早く、救援の隊列に加わったのが、当時社会党の国会議員であった猪俣浩三氏である。氏は率先して国会の場——衆議院法務委員会を利用し、当局の国際法違反と人権を踏みじめる卑劣な行為を弾劾した。陳玉璽の母校であるハワイ大学でも、進歩的な教員と学生が川田女史の支援を得て、繰り返し抗議デモを展開した。

川田泰代は、自著『良心の囚人』にこう書いている。

「わたしには二人の成人した娘と息子がある。その息子たちと比べて、彼（陳玉璽を指す——訳者）は数段すぐれた青年である。実質的には、たった2ヵ月余りの保護期間であったのだが、あれから、数年間、わたしが彼にそそいだエネルギーは、わたしの2人の息子と、すでに結婚して、一女を生んだ娘とに捧げた母親としての30年に余る養育の苦労を、遙かに上廻ったものであった」

偶然知り合った青年に対する愛情について、川田泰代は自著のなかで「無宰の青年の不幸な境遇を見るに忍びなかった」と記しているが、さらに重要なのは「本件は私にとって、いまだに清算されていない戦争責任の問題と無縁ではない」「侵略戦争及び植民地の民衆に対する弾圧」を一人の日本人として永遠に忘れることはできなかつた、と心の内を表明していることである。

1968年8月、台湾軍事法廷は国際社会世論の圧力下で、陳玉璽の死刑求刑の変更を余儀なくされたものの、いわゆる「懲治叛乱条例」に照らし、被告が滞日中に中国共産党系の華僑新聞「大地報」に協力したことを取り上げ、動乱煽動罪で禁固七年の刑を言い渡した。しかし川田泰

■中国との絆

代はそこで立ち止まらず、関係方面に圧力を加え続けると同時に、台湾と共謀した日本の入管当局の法的責任の追及に乗り出し、これによって運動を深化させたのであった。結局、台湾当局としても3年8ヵ月服役させた陳玉璽を、刑期満了を待たずに「恩赦」で釈放せざるを得なかった。

出獄後、陳玉璽は渡米し、一家揃ってニューヨークで暮らす。彼が川田泰代ら昔日の命の恩人を東京へ訪ねたのは1988年のことである。主客ともに感極まり、感動的な再会であった。ただ唯一の心残りは、川田と手を携え、全力で救援活動に当たった宮崎竜介氏が、すでに鬼籍に入られたことであった。

〔訳者註〕「陳玉璽事件」の顛末については、川田泰代『良心の囚人－陳玉璽小伝』（亜紀書房、1972年）が、克明にその経緯を伝えているが、参考までに、陳玉璽氏の略歴ならびに「事件」の大まかな流れを、以下、年表風にまとめておきたい。

1939年

1月2日 日本統治下の台湾に下層中農の子として生まれる。

1964年

9月 ハワイ大学東西文化センター（修士課程）に留学。在学中、ベトナム戦争が勃発し、反戦運動に関与。

1967年

6月 台湾当局より帰国命令。

8月17日日 2ヵ月有効の観光ビザで来日。

9月中旬 11月初旬まで約2ヵ月、川田泰代女史宅に起居。

秋

訪台した法務大臣、入管局長と台湾要人のあいだで、台湾側が在日中国人麻薬犯らを引き受けることを条件に、日本政府が台湾への在日中国人政治犯の送還を約した「日台密約」が交わされる。

1968年

1月8日 日本での学業継続を希望する陳氏のため、川田女史の要請に応じた宮崎竜介弁護士が身元引受人となり、東京入管事務所へ特別在留許可を申請。

1月23日 入管の指示どおり、特別在留のための身元保証金10万円を納付。2月末までの仮放免が決定。

2月8日 入管事務所から呼び出され、出頭したところ、強制収容さる。

2月9日 政治犯の強制送還を禁じた国際慣習法を無視した入管によって、羽田空港で台湾側へ引き渡される。逮捕され、保安司令部に留置。陳氏が突然姿を消したことを不審に思った川田女史、単身、真相究明に乗り出す。支援の輪は日本のみならず、(ハワイ、アメリカ本土へも広がる。

4月19日 衆議院法務委員会において、猪俣浩三議員の質疑に対し、入管局長が「出国は本人の自由意志による」と虚偽の答弁。

6月 台湾当局による死刑求刑。

6月24日 川田女史の呼び掛けで、「陳玉璽君を守る会」結成。

■中国との絆

8月10日 禁固7年の判決下る。この後、ハワイを中心に釈放要求運動が高まる。

1971年

10月25日 「恩赦」により釈放。

★中国再訪の願い

川田泰代は老いて我が子を喪う悲哀を味わう。数年前、不治の病に冒された長女に先立たれたのであった。しかし、悲しみをこらえて野辺の送りを済ませた川田は、以前と変わることなく再び社会活動に挺身した。筆者の東京常駐中、彼女の紹介・同行で、中国人記者は東京目白の宮崎滔天の旧居や九州熊本の宮崎三兄弟資料館。福岡壱岐島にある日本の「電力王」松永安左衛門記念館、尾崎秀実——ソルゲ事件記念集会、徳田球一記念会など、バラエティーに富む取材活動を行うことができた。近年は、中国人留学生のあいだで川田女史の姿を見かけることも少なくない。

川田泰代はその知名度の高さと情熱をもって、日中友好の発展のために、たゆむことなく尽力した。我が国の駐日大使館が早くから彼女を賢賓としているのはそのためである。彼女は苦勞を厭わず何度も日中両国を往来した。6名からなる訪中団とビデオフィルム撮影隊員を引き連れ、東京からはるばる佳木斯に出向き、2年前に郊外の小高い丘の上に建てられた緑川英子の墓に参り、ハルビンの東北烈士記念館を参観したのは、1985年、古稀を越えてからである。帰国後、彼女は「長谷川テルの足跡をたどる」(本誌1985年9月号、86年7月号連載——訳者)という長文の報告をしたためたほか、大小の講演会でビデオを放映し、東北の旅の紹介に努めた。

数十年来、川田泰代はこのように奔走してきた。82歳になった彼女は筆者にこう語る。『目下、最大かつ最後の願いは、足腰の立つうちに、もう一度中国を旅すること、そのために毎日、鍛錬のための散歩を欠かさないのよ』。

朝日新聞社編『現代人名事典』の川田泰代の項では、彼女を「記者兼平和運動家」と評している。数年前、日中両国の老友が東京で一堂に会し、川田女史の誕生日を祝ったとき。このことが話題になると、彼女は口を開いた。「私の職業ねえ、記者と言っても、これまでお金になる原稿を書いたことがあるわけじゃなし、市民団体の指導者と言ったところで、ちっぽけな団体よ。要するに、私はものにならなかったということね」。彼女のユーモアたっぷりの発言に、満場笑いに包まれた。

すると、川田泰代の最大の理解者であるベテラン作家、宇佐美省吾氏がそれを打ち消すように声をあげた。「ものにならなかったですって！

川田先生は作家としても人間としても桁が違うんですよ。普通の『器』では収まり切らない！それに小説を2篇も書いておられるじゃありませんか！」

川田泰代は虚心坦懐、言行一致の人である。名利など彼女とは無縁らしい。ただ自分の信念に基づき働き、生きる、それが川田泰代女史である。

(1998年3月記)

楊 国光 (ヤン・グオクワン) 氏 1932年、上海に生まれる。
父は新中国初期、対日関係指導者として活躍した楊春松 (ヤン・チ

■中国との絆

ユンソン) 氏。39年、父の仕事の関係で来日。日本の小中学校に学ぶ。50年帰国。54年旧ソ連へ留学し、国際関係学を専攻、60年モスクワ国際関係大学卒。帰国後、商務印書館(60-63年)、外文出版社(60-83年)に勤務。84年、中国新聞社駐日特派員として再来日、86-94年、同社東京支局長。現在、中国新聞社記者。共訳著に『松永安左衛門』(宇佐美省吾著、中国国際広播出版社)、近く、父親の革命家としての数奇な生涯を描いた『ある台湾人の軌跡-楊春松とその時代-』を露満堂より上梓予定。本稿は「川田泰代的中国情結」の題で、『回眸東京』(中国青年出版社、1999年)及び中国誌『視点』(中国新聞社、1998年9月号)に収録。

(月刊『状況と主体』280号、1999年)